

人びとのリスク判断と信頼

中谷内 一也

一般市民がリスクを判断する仕方はさまざまな要因によって変化する。なかでも、対象となる問題について深く理解しようとする動機づけの強さと、知識の構造化の程度は、その個人のリスク情報処理の精緻さに最も強く影響を与える。たとえば、妊娠している女性はそうでない人よりも、胎児の成長に関心が強く、それに影響しうる問題について知っておきたいという動機づけが強い。そのため、魚の水銀含有についての情報があれば、より丁寧に読んで魚を食べることについて判断を行うだろう。また、そもそも遺伝子とは何かさえ知らないという知識水準であれば、遺伝子組み換え作物のリスクについて最新の技術的情報が提供されたとしても、情報内容を丁寧に読み込んでリスク判断を行うことは難しいだろう。

食に関して豊かになった今日の日本では、特定の食材にこだわる必要はそれほどない。したがって、多くの一般市民は特定の問題について丁寧に情報を吟味しようとする動機づけは高くなりにくいだろうし、次々に報じられる食の問題に対応して、技術的情報を読みこなせるよう知識を蓄えておくような余裕もない。そのため、実際のリスク判断は情報処理負荷の低い方法で行われることが多い。

情報処理負荷の低いリスク判断の仕方としては、ヒューリスティクスを用いた判断や、リスク認知の2次元モデルで説明されるようなイメージによる判断などがあるが、最も負荷の低い判断としては信頼に基づくリスク判断が挙げられる。「アメリカが信頼できないから輸入牛肉は食べない」とか、「日本の政府が国民に悪いものを食べさせるはずがないから大丈夫」というような判断の仕方である。では、その信頼は何によって決まるのであろうか。

この問題に対して、社会心理学研究の標準的なモデルは、対象となる人ないしは組織に能力があり、公正な性格をもつと認知されるなら信頼される、と回答する。この標準的なモデルに従うかたちで、これまでリスク管理機関は政策の科学的根拠を示すことで能力認知を向上させ、また、第三者機関のリスク評価を利用するなどして公正さの認知を改善しようとしてきた。ところが、このような方法を用いても、信頼は必ずしも向上しない。なぜだろうか。「人は、相手と自分とが当該問題において重要な(salient)価値を共有していると認知すると、その相手を信頼する。信頼の本当の規定因は価値の類似性認知である」と考える Salient Value Similarity (SVS) モデルでは、能力や公正さは信頼に基づいて帰属されるケースが多いので、標準的モデルに従った方法では信頼は築かれず、と説明する。

そこで、標準的モデルと SVS モデルの説明力の高さを検討するため、開発が進められている遺伝子組み換え作物の一つ「花粉症緩和米」を材料として、首都圏在住の一般市民を対象とした社会調査を実施した。取り上げた関係機関は、農林水産省、厚生労働省、国連の関連機関、反 GMO の市民団体、花粉症の患者団体、であった。各機関への信頼を従属変数、SVS 認知、能力認知、公正さ認知、を独立変数とする重回帰分析を行ったところ、全体的にみて最も偏回帰係数が高かったのが価値の類似性認知であり、公正さ認知はそれに近い値で、能力認知は大きく隔たって最も値が小さかった。これらの結果から、リスク管理機関への人びとの信頼を最も説明するのは価値を共有しているという意識であり、有能さの評価はそれほど信頼へとは結びついていないことが示唆された。

食の安全に関して問題が生じたとき、リスク管理機関は政策の合理性を科学的に説明しようとすることが多い。それはもちろん必要な行為であるが、信頼獲得という見地からはそれだけでは不十分である。むしろ、人びとの価値に配慮し、政策は消費者の価値を守るためのものであることを伝えることが必要だといえる。